（二〇一九年度）

4 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は19ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

〈普遍語〉とは何か？

私は、〈普遍語〉とは、〈書き言葉〉と〈話し言葉〉のちがいをもっとも本質的に表すものだと思っている。

〈話し言葉〉は発せられたとたんに、その場で空中にあとかたなく消えてしまう。それに対して、〈書き言葉〉は残る。だが、[1]〈書き言葉〉がたんに物理的に残るというだけでは意味がない。古代エジプト語や古代ギリシャ語の文章が刻みこまれたロゼッタ・ストーンは、重さ約七百六十キロもあり、いかなる力持ちにも動かせるものではない。紀元前二世紀に造られたものだが、昔の人が、ロゼッタ・ストーンに刻みこまれた文章を読むため、海越え山越えはるばるエジプトまで行かねばならないようだったら、〈書き言葉〉はここまで人類にとって意味をもちえなかった。〈書き言葉〉は写すことができる。それも、羊皮紙や紙など、並みの人間が動かせる程度の軽いものに写すことができる。しかも、何度も何度もくり返して写すことができる。それゆえに、どこまでも広まり、どこまでも広まることによって、地球のあちこちでさまざまな言葉を話す人がそれを読むことができる。そして、読んだあとに、その〈書き言葉〉を使って、自分なりの解釈を書き足すこともできる。そうすることによって、人類の叡智（えいち）が蓄積されつつ広まる。〈書き言葉〉が、このようなものであるがゆえ、長年にわたる人類の叡智が、蓄積されつつ、大きく広く拡がっていったのである。

ご存じのように、ヒトは、動物の種としては、ラテン語で「ホモ・サピエンス」と命名されている。「ホモ」が「人間」、「サピエンス」が「知っている」で、「ホモ・サピエンス」とは「知っている人間」。すなわち、人類は〈叡智のある人〉と命名されている。〈書き言葉〉の発明は、人類を名にし負う〈叡智のある人〉へと、[2]幾何級数的に転じたのであった。

そして、その〈書き言葉〉による人類の叡智の蓄積は、たいがいの場合は、一つの〈書き言葉〉でなされたほうが論理に適（かな）う。どんな言葉で話していようと、地球に住むすべての人が一つの〈書き言葉〉で読み書きすれば、人類の叡智は、もっとも効率よく蓄積されるからである。

事実、この世でもっとも純粋な学問だとされる数学は、今や、数学言語という一つの共通した〈書き言葉〉でなされ、それによって、地球に住むすべての人たちに開かれたものになっている。誰にとっても〈母語〉ではない数学言語こそ、もっとも純粋な〈普遍語〉なのである。

[3] 実際、人類の〈書き言葉〉の歴史は、〈普遍語〉がもつそのような機能を、存分に生かしてきた歴史であった。

〈書き言葉〉の起源はわからない。交易の際の記録だったのかもしれないし、呪術的なものだったのかもしれない。だが唯一はっきりとしていることがある。それは、人類の歴史を見れば、文字というものが、そうかんたんに生まれるものではないということである。今、世界にあるさまざまな文字も、歴史を遡(さかのぼ)れば原型となる文字が変化してできたものであるし、ほんとうの出発点は一つしかないという〈私にはまだ信じられない〉説さえもある。つまり、人類にとって、〈書き言葉〉というものは、自分たちが発明するものではなく、ほとんど例外なく外から伝来したもの――あたり一帯を覆う、古くからある偉大な文明から伝来したものであった。[4] 歴史的にも、〈書き言葉〉は〈外の言葉〉であって、あたりまえだったのである。

よくある表現に、「文字が入ってきた」という表現がある。歴史のなかで、無文字文化が文字文化に転じたときに使う表現である。だが、より正確な言い方をすれば、無文字文化が文字文化に転じるのは、たんに文字が伝来するからではない。人は、外から文字が伝来するや否や、あんれまあ、これはこれは世にもありがたいものが入ってきた、さあ、それではその文字とやらを使って〈自分たちの言葉〉を書いてみよう、などといって文字文化の仲間入りをするわけではない。鋤(すき)や鍬(くわ)が伝来したからといって、人は突然畑を耕すわけにはいかない。畑を耕すことの意味がまず理解されなければならないからである。いわんや、文字においてをや、である。外から伝来するのは、まずは文字そのものではなく、文字が書かれた巻物の束である。そして、ある文化が無文字文化から文字文化に転じるというのは、まずは、少数の人が、それらの伝来した巻物の束――〈外の言葉〉を読めるようになるのをいう。すなわち、その社会に少数の[5]二重言語者が誕生するのをいう。

巻物の束は、さまざまな方法で入ってくるであろう。戦争の相手からも入ってくるであろう。交易の相手からも入ってくるであろう。難民の群からも入ってくるであろう。皇帝の贈り物として、使者の頭上に高く掲げられ入ってくることも、布教活

動の一端として、僧侶が抱えて入ってくることも、また、時によっては、異端の書として、流刑者の懐の奥深くに秘められて入ってくることもあるであろう。だが、[6]巻物の束は、たとえそれが金の箱に納められていようと、ふつうの宝物とはちがう。たしかに巻物はモノとして存在しなければならないが、読むという行為がなければ、それは黒い点や線が描かれた白い羊皮紙や紙でしかないからである。〈書き言葉〉の本質は、書かれた言葉にはなく、読むという行為にあるのである。

しかも、二重言語者は、たんに外から伝来した巻物を読めるようになるだけではない。二重言語者が外から伝来した巻物を読めるようになったとき何がおこるか。かれらは、実は、その〈書き言葉〉で書かれた〈図書館〉へと出入りできるようになるのである。

ここでいう〈図書館〉とは、蓄積された書物の総体を抽象的に指す表現である。建物のあるなしは問題としない。戦争、火事、洪水、盗難、焚書（ふんしょ）など、さまざまな歴史の荒波にもかかわらず、人類にはなお残されたたくさんの書物があり、その、たくさんの書物を集めたものが〈図書館〉である。外から伝来した巻物を読めるようになることによって、二重言語者は、その〈図書館〉への出入りが、潜在的に、可能になる。

無文字文化が文字文化に転じるというのは、すなわち、伝来した巻物を読める少数の二重言語者が誕生するだけでなく、それらの少数の二重言語者が、そのような〈図書館〉に、潜在的に、出入りできるようになるのを意味するのである。

人類は文字文化に入って、それまでとは異なった次元での、〈叡智のある人〉となった。だが、それは、読むという行為を通じて、読んだことを覚えられるからではない。記憶の量からいえば、無文字文化の長老のほうが、はるかに優れているであろう。人類が、それまでとは異なった次元での、〈叡智のある人〉となったのは、読むという行為を通じて、人類の叡智が蓄積された〈図書館〉に出入りできるようになったからにほかならない。そして、そのような〈図書館〉に出入りするということ――すなわち、読むという行為は、歴史的には、〈普遍語〉を読むということであり、二重言語者であるのを必然的に強いたのであった。別の言い方をすれば、[7]叡智を求めるという行為は、それが〈書き言葉〉を通じての行為である限りにおいて、二重言語者であるのを必然的に強いたのであった。

人は言うかもしれない。たとえば、ローマ帝国時代のローマ人は、ラテン語を話し、ラテン語で読み書きしていたではないかと。だが、そのローマ人でさえ、ラテン語で読み書きするようになる前は、当時、東地中海一帯の〈普遍語〉であったギリシャ語(アッティカ方言)で読み書きしていたのである。かれらがラテン語の散文で書くようになったのは、紀元前三世紀に活躍した大カトーからだといわれている。しかも、ラテン語の〈書き言葉〉はギリシャ語の〈書き言葉〉を翻訳するという行為から生まれたのであり、ローマ人が自分たちの〈話し言葉〉を書き表そうとして生まれたものではない。

近代以前の人々には、〈書き言葉〉が〈話し言葉〉をそのまま書き表したものだという考えはなかった。近代に入り、ヨーロッパで古典教養の一部となったキケロやセネカの散文は、〈話し言葉〉とは異った「 8 」で書かれているといわれているが、それは〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を書き表すものだという、のちに生まれた考え方を過去に投影したものの言いかたにすぎない。近代以前の人々は、たとえ〈自分たちの言葉〉で書いていようと、「 8 」で書くのを当然としていた。

(水村美苗『日本語が滅びるとき――英語の世紀の中で』)

〈注〉

ロゼッタ・ストーン…古代エジプトの石碑。古代エジプト語の神聖文字と民衆文字、およびギリシャ文字が刻まれている。　大カトー…古代ローマの政治家、文筆家。　キケロ…古代ローマの政治家、哲学者。　セネカ…古代ローマの政治家、哲学者。

問一　傍線部1のように言えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　〈書き言葉〉は、繰り返し写され、広がり、解釈され、徐々に変化してこそ真の意義をもつから。

b　〈書き言葉〉は、多くの人に読まれ共有されてはじめて〈話し言葉〉とは異なる意義をもつから。

c　〈書き言葉〉は、それを書き写すための羊皮紙や紙などの持ち運ぶことのできる媒体の発明を促したところにこそ、その意義があるから。

d　〈書き言葉〉は未発掘の遺跡の中に眠っている間は意味をもたず、発見されて人々の注目が集まることによって意義を獲得するから。

問二　傍線部2はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　絶えず一定の速度で変容させた

b　同心円状に転換していった

c　加速度的な勢いで変えた

d　一瞬にして反転させた

e　秩序正しく整然と変化させた

問三　傍線部3はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　〈書き言葉〉は、数学のような純粋な〈普遍語〉となることによって、人類の叡智を蓄積し広めるという機能を獲得した。

b　人類の〈書き言葉〉の歴史は、人類の叡智を効率よく蓄積し広めるために、一つの〈書き言葉〉を求める歴史であった。

c　さまざまな〈書き言葉〉が歴史を通じて発達してきたのは、少数の〈普遍語〉が人類の叡智を蓄積し広めてくれたおかげである。

d　人類は、広く共有される〈書き言葉〉を使うことによって、人類の叡智を蓄積し広めることに成功してきた。

問四　傍線部4のような事態が生じたのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　文字が新たに発明されることはめったにないため、たいていの言語は、他の言語で使用されている文字が伝わることによって文字を獲得したから。

b　文化というものは偉大な文明からその周辺へと伝わっていくものであり、文字はその文化の言語とともに伝わっていくものだから。

c　文字というものはもともと〈話し言葉〉を表現する手段として生まれたものではなく、交易の記録や呪術的なものとして生まれたものだから。

d　たいていの言語において〈書き言葉〉は〈話し言葉〉と本質的に異なっているので、多くの人にとっては外国語のようになじみのないものだから。

問五　傍線部5「二重言語者」に当てはまる記述はどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　文字を使うことによって〈話し言葉〉と〈書き言葉〉との間を自由に往復することができる。

b　〈普遍語〉としての〈書き言葉〉を解することによって、潜在的に多くの書物に接近可能である。

c　巻物に書かれた文字だけでなくその背後にある思想を理解することによって、文化の発展に貢献する。

d　〈外の言葉〉を理解することによって、人類を新しい次元の〈叡智ある人〉へと導く。

問六　傍線部6はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　巻物は、点や線が描かれた羊皮紙や紙にすぎないので、もともと通常の宝物のような価値はない。

b　巻物は、それ自体が価値をもつわけではなく、読まれることによって価値を発揮するという点で、通常の宝物とは異なる。

c　巻物は、読まれることによって地域に叡智をもたらすという点で、豪奢（ごうしゃ）な宝物も及ばないような高い価値をもつ。

d　巻物は、〈書き言葉〉を読むという技能を発達させるという点で、絢爛（けんらん）な宝物以上の高い価値をもつ。

問七　傍線部7はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人類の叡智の蓄積に接することができるには、〈書き言葉〉を解さなければならないが、〈書き言葉〉は基本的に〈外の言葉〉なので、母語以外の言葉を解する人であらざるをえない。

b　人類の叡智の蓄積を理解できるようになりたければ、〈話し言葉〉とは本質的に異なる〈書き言葉〉を読むことができる人にならなければならない。

c　人類の叡智を蓄積した〈図書館〉に出入りして新しい次元の〈叡智ある人〉になるためには、母語を表現する〈書き言葉〉の他に〈普遍語〉という〈書き言葉〉を解する人であらざるをえない。

d　人類の叡智を蓄積した〈図書館〉に自由に出入りするためには、さまざまな書物が書かれたさまざまな言語の〈書き言葉〉を操る人になるしかない。

問八　空欄8に入るべき語句は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　口語

b　方言

c　母語

d　文語

問九　本文の内容に合致する記述はどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「文字が入ってきた」という表現は、伝来した文字によって〈自分たちの言葉〉を書くようになるということを示唆する点で正確さに欠ける。

b　外来の巻物を読めるようになった二重言語者は、〈書き言葉〉による〈図書館〉に出入りし、さまざまな〈書き言葉〉で書かれた書物を読むことが可能になる。

c　数学がもっとも純粋な〈普遍語〉であるのは、特定の文化に左右されない数学的真理を表現しているからである。

d　〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を書き表したものだという考えは、近代において人類の叡智の蓄積が高度に進んだために生じたものであり、近代以前の人々にはなかった。

問十　〈普遍語〉に当てはまる記述はどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　〈話し言葉〉と違って後世に残るという〈書き言葉〉の特質こそが、〈普遍語〉を成立させる主な要因である。

b　〈普遍語〉は人類の叡智の蓄積に貢献するが、他方さまざまな〈話し言葉〉を表現する〈書き言葉〉を衰退させる。

c　数学は、人類の叡智の発展のためには一つの〈普遍語〉があるほうが望ましいということを例証している。

d　〈普遍語〉を理解し〈書き言葉〉の〈図書館〉に出入りできる二重言語者は少数であるため、文明は人々の間に不平等を生む。

二

次の文章は、九条殿藤原師輔について述べたものである。読んで後の問に答えよ。

いにしへより今にかぎりもなくおはします殿の、ただ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心憂く口惜しきことにてはおはしますといへば、侍、されど、ことの例には、まづその御時をこそは引かるめれといへば、それは、(1)いかでかはさらでは侍らん。そのみかどのいでおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。(2)さらざらましかば、このごろわづかにわれらも(3)諸大夫ばかりになり出でて、所々の御前、雑役につられ歩きなましとこそ、入道殿は仰せられければ、源民部卿は、さる形したるまうちぎみだちのさぶらはましかば、(4)いかに見苦しからましとぞ、笑ひ申させ給ふなる。かかれば、(5)おほやけわたくし、その御時のことをためしとせさせ給ふ、(6)ことわりなり。

御物の怪こはくて、いかがと思し召ししに、大嘗会の御禊にこそ、いとうるはしくてわたらせたまひにしか。それは、人の目にあらはれて、九条殿なむ(7)御うしろを抱きたてまつりて、御輿のうちにさぶらはせたまひけるとぞ、人申しし。げに(8)うつつにてもいとただ人とは見えさせたまはざりしかば、ましておはしまさぬあとには、さやうに御まぼりにても添ひ申させ給ひつらん。

(9)さらば、元方卿、桓算供奉をぞ、逐ひのけさせたまふべきな。

(10)それは又しかるべき前の世の御報にこそおはしましけめ。さるは、御心いとうるはしくて、世のまつりごとかしこくせさせ給ひつべかりしかば、世間にいみじう(11)あたらしきことにぞ申すめりし。

（大鏡）

＊冷泉院…冷泉天皇。第六三代天皇。九五〇～一〇一一。在位は九六七～九六九。母は師輔女安子。

諸大夫…摂関・大臣家の家司を務める四位五位を極位とする家柄の者。「まうちぎみ」も同意。

入道殿…藤原道長。九六六～一〇二八。父は師輔男兼家。

源民部卿…源俊賢。九六〇～一〇二七。母は師輔女。
大嘗会の御禊…天皇即位後初の新嘗祭に先立って行われる潔斎。
九条殿…藤原師輔。九〇九～九六〇。
元方卿…藤原元方。八八八～九五三。死後怨霊化したという。
桓算供奉…比叡山の僧。生没年未詳。死後怨霊化したという。

問一　傍線部(1)「いかでかはさらでは侍らん」を現代語に訳すとどのようになるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　どうして、そうなるのでしょう。
b　どうして、そうならないのでしょう。
c　どうして、そうなることがありましょう。
d　どうして、そうならないことがありましょう。

問二　傍線部(2)「さらざらましかば」とあるが、具体的にはどのようなことをいうのか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　もしも九条殿がいらっしゃらなかったら。
b　もしも冷泉天皇の事例を引かなかったら。
c　もしも冷泉天皇が即位なさらなかったら。
d　もしも摂関家が栄えることがなかったら。

問三　傍線部(3)「諸大夫ばかりになり出でて」とあるが、どのようなことをいうのか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　零落　b　出世　c　繁忙　d　堕落

問四　傍線部(4)「いかに見苦しからましとぞ」とあるが、なぜ見苦しいのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　諸大夫になるには教養が足りなかったから。
b　諸大夫になるには学問のみに励みすぎたから。
c　諸大夫になるには家柄が貧相であったから。
d　諸大夫になるには容貌が上品すぎたから。

問五　傍線部(5)「おほやけわたくし」とあるが、Ⅰ「おほやけ」に該当するもの、Ⅱ「わたくし」に該当するものを、次の中から一つずつ選べ。

a　冷泉院　b　入道殿　c　源民部卿　d　元方卿

問六　傍線部(6)「ことわりなり」とあるが、なぜ冷泉天皇の時代の事例が後代の例になったというか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　冷泉天皇の時代は世の中がよく治まったから。
b　冷泉天皇の時代は世の中がひどく乱れたから。
c　冷泉天皇の時代に藤原北家の覇権が定まったから。
d　冷泉天皇の時代を最後に藤原氏の威勢が衰えたから。

問七　傍線部(7)「御うしろ」とあるが、誰の背中か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　冷泉院　b　入道殿　c　源民部卿　d　元方卿

問八　傍線部(8)「うつつにても」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　夢心地の状態であっても。

b　夢から覚めた正気の状態でも。

c　生前でも。

d　物語に虚構されない現実においても。

問九　傍線部(9)「さらば」とあるが、どうであるならばというのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　九条殿自身が実は強力な物の怪であるのならば。

b　九条殿が物の怪を退治する能力があるのならば。

c　九条殿に物の怪を退治する能力がないのならば。

d　九条殿に物の怪に憑かれた経験があるのならば。

問十　傍線部(10)「それ」は何を指しているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　死後に守護霊となるか、怨霊となるか。

b　どんな守護霊が付くか、怨霊が憑くか。

c　守護霊が怨霊に勝つか、怨霊が勝つか。

d　怨霊に苦しめられることになるか否か。

問十一　傍線部(10)以下の記述は、

Ⅰ〈冷泉院について述べたとする解釈〉と、Ⅱ〈九条殿について述べたとする解釈〉とがある。それぞれの解釈について、傍線部(11)「あたらしき」とあるが、なぜもったいないというのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

〈Ⅰ〉

a　物の怪の御蔭（おかげ）で冷泉院があまりにも短命に終わってしまったから。

b　物の怪に悩んで冷泉院の治世が短く終わってしまったから。

c　九条殿の御蔭で冷泉院に物の怪が憑（つ）かなくなったから。

d　冷泉院が物の怪に悩んだ御蔭で、藤原氏が全盛期を迎えられたから。

〈Ⅱ〉

a　物の怪の御蔭で九条殿があまりにも短命に終わってしまったから。

b　物の怪に悩んで藤原氏の全盛期が早く終わってしまったから。

c　九条殿の御蔭で冷泉院に物の怪が憑（つ）かなくなったから。

d　冷泉院が物の怪に悩んだ御蔭で、藤原氏が全盛期を迎えられたから。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送り仮名を付していないところがある。

釈法朗高昌人。幼而執行精苦、多諸徴瑞。韜光蘊徳、人莫測其所階。朗師釈法進亦高行沙門。進嘗閉戸独坐。忽見朗在前。問従何処来。答云「従戸鑰中入」。云「与遠僧俱至。日既将中、願為設食」。進即為設食。唯聞匕鉢之声。竟不見人。昔廬山慧遠、嘗以一袈裟遺進。進即以為嚫。朗云「衆僧已去。別日当取之」。後見執爨者就進取衣、進即与之。訪常執爨者、皆云不取。方知是先聖人権迹取也。至魏虜毀滅仏法。朗西適亀茲。亀茲王、与彼国大禅師結約。「若有得道者至当為我説。我当供養」。及朗至乃以白王。

王待以聖礼。後終於亀茲。焚屍之日。両眉湧泉、直上于天。

8 衆歎希有、収骨起塔。後西域人、来北土具伝此事。

（梁・釈慧皎『高僧伝』巻十）

〈注〉

○高昌…現在の新疆ウイグル地区　○匕…匙。スプーン　○廬山慧遠…三三四～四一六年。東晋の仏教界の中心的人物の一人　○嚫…施　○執爨者…炊事係　○魏虜…北魏の異民族　○亀茲…クチャ。現在の新疆ウイグル地区

問一　傍線部1「徵瑞」と異なる意味で「徵」が用いられるものを次の中から一つ選べ。

a　徵祥　b　徵集　c　徵験　d　徵兆

問二　傍線部2「光」とは何の比喩か、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　名誉　b　財宝　c　英知　d　栄光

問三　傍線部3はどういう意味か、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　誰も僧の位がどれほどに到達しているのか知らなかった。

b　どの階段を登ればよいのか誰も見当がつかなかった。

c　修行の段階がどこまで上がるのか誰もわからなかった。

d　天のどこまで登っていくのか推測できる人はいなかった。

問四　傍線部4は、どういう意味か、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　天空を歩ける　b　行いの優れた　c　高い位にあった　d　高い志を持った

問五　傍線部XYZと同じ意味で用いられるものを、次の中からそれぞれ一つ選べ。

X　竟　a　畢竟　b　竟宴　c　竟日　d　竟内

Y　遺　a　遺贈　b　遺失　c　遺産　d　遺棄

Z　終　a　終天　b　始終　c　終朝　d　臨終

問六　傍線部5「人」とは誰か、次の中から適切なものを一つ選べ。

a　法朗　b　法進　c　遠僧　d　慧遠

問七　傍線部6はどういうことか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　法進自身が炊事係に姿を借りて自分で自分の袈裟を受け取ったことがようやくわかった。

b　袈裟を受け取った炊事係は先日立ち去った聖僧の化身であったことがやっとわかった。

c　慧遠が炊事係に化けて法進に贈った袈裟を取り戻したことをはじめて理解した。

d　炊事係を操っていた法朗がまんまと袈裟を自分のものにしたことがわかった。

問八　傍線部7の返り点としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　若 有二得 道 者 至一、当レ為二我 説一。

b　若 有二得 道 者一至、当レ為二我 説一。

c　若 有レ得レ道 者、至 当 為二我 説一。

d　若 有二得 道 者 至一、当二為レ我 説一。

問九　傍線部8「衆 歎ジ希 有ヲ」とあるが、人々はどんなことを希有なことだと感嘆したのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　北魏の廃仏政策にもかかわらず、仏法を究めた者がいたこと。

b　得道者が、法朗が亀茲にやってきたことを悟ったこと。

c　亀茲王が、法朗を礼をもって処遇し供養したこと。

d　法朗の死体の眉から泉が湧き出してそのまま天に上ったこと。